

文献紹介

原 眞一：『写真地理を考える』

ナカニシヤ出版. 2012年, 150P.

安積 紀雄

本書の表紙の帯には「歩いて、見て、効果ある写真を撮り、そこから地理的表現を読む（読写力）。地理学の新しい試み〈写真地理〉」と明記される。この言葉こそが著者の最も訴えたい書物の本質といえよう。このことは地理関係者の共通した認識ではあるが、それを長期間、世界を相手にして徹底的に実践するパワーの持ち主はきわめて少ないと思う。当該書は約40年の長きにわたり巡検などがわが国のみならず、世界各地の写真を自身の姿勢で撮り続け、それを系統的にまとめたもので、このような類書は地理分野では多くはない。

以下に本書の主な構成において、その内容から読み取れたポイントを述べてみる。全体の成り立ちは8章におよび、そのうち1章から3章までは序論として位置付けられ、他の章は地誌と写真、およびテーマと写真などを理解するための具体的な事例が数多くの多様な写真を基に記されている。序論は具体的には1章が地理写真を考える。2章がシャッター・チャンスを活かす。3章がスキルとしての地理写真を設定し、これら3部作で記述される。

まず、1章1節の地理写真を求めてにおいては地域や景観などを見る目、端的にいうと、観察眼を養うことが肝要である。いわゆる、一写入魂の重要性を強調する。2節では地理写真は地理の目と写真の眼が融合したものであり、その場合、写真のもつ特性、および地理写真の留意すべき点双方が数多く指摘されている。3節の場合は地理写真の撮り方については、撮影の観点と地理写真の内容の観点に大別し、写真の提示の仕方は4つの見方に区分する。そして写真の読み方は、つまり如何に読写するか、これに関しては、その能力を養うことの重要性に力点を置いている。

4節の地理写真を基に地理教育との関係を捉えようと、次に述べる4つの係わりが把握できる。①景観・風土・環境・地理的事象 ②地理的表現 ③地理教育的効果 ④地理的見方・考え方、以上の4項目が

地理教育の立場から追求すべき諸点として提示される。5節の地理写真と写真地理各々に関しては、地理写真は地理的な視点で撮影され活用された写真であり、他方、写真地理は端的にいうと、地理写真の特質を活かしたものと定義している。しかし、評者はこの写真地理の見解が十分に体得できない。

2章のシャッター・チャンスを機能させる点に移ると、シャッター・チャンスは景観や地理的事象などを鋭く観察すること、これに加えて、偶然のシャッター・チャンスは一瞬の反応力の発揮が不可欠となる。シャッター・チャンスを生かした事例は列車の車窓、バスの車窓、航空機の窓からの3部門に分けて、地理的に見て意義をもつ写真として多数掲載されている。評者はこれらの写真を通じて常日頃から偶然に対する構えが如何に必要かを痛感した。

3章はスキルを身に付けるための地理写真の取り組み方を以下の様に8項目に分けて述べている。①1枚の写真から景観を読む ②1枚の写真から大都市の新旧の景観を読む ③地域の変貌を読む ④2枚の写真から共通テーマを設定する。⑤対称的な生活環境を考える。⑥写真と地形図（地図）を併用する ⑦暮らしを読む。⑧文学作品の景観描写から地域性を想像する。上記の写真を読む8つの視点はそれぞれのもつ価値は大きく、読写力を養うべき観点を体系的によく整理・分類されている。これだけ豊富な読写力の区分設定が可能であることは、著者の幅広く意味深い写真の一大集合による成果といえよう。なかでも地域の変貌を読む写真としての阪神淡路大震災における被災と復興を表わす同一場所のそれぞれのものは貴重な財産に値する。

4章と5章は地誌と写真というテーマで、前者が世界編、後者が日本編に区分される。世界編は9つの国・都市で構成され、いずれにおいてもキーワードを設けて、特色の強い写真が多数載せられる。そして、各々の国・都市については詳細な説明文が付記され、写真の理解をより深化させる。日本編は9

つの都市・村・島に分けられ、それらを取り上げた理由は明瞭に把握でき、それを反映する写真が多数登場し、写真を通じて解説文が容易に消化できる。

6章はテーマと写真を選定し、ここでは各地の地理的事象に基づくテーマについて写真をベースにして明らかにする。選ばれたテーマは24件という豊富な数におよび、世界と日本に2分され、多岐にわたるが、その基本には地理(学)において重視・注目すべき事項である。その場合、多くのテーマ自体が複数の地域との比較を踏まえて明白にしていることは地理的見方として説得力に富む。こうした方法は著者の長年にわたる広範囲な地域を含めた写真蓄積のなせる業といえる。また、1枚1枚の写真にはタイトル以外に撮影年月、および相当な説明文が加えられ、このことは各テーマに対する地理的事象の理解度を向上させ、同時に著者の膨大な地誌的知識量、およびグローバルな行動力をひしひしと示す。

7章は景観と写真との係わりが求められ、そこでは日本と世界の自然景観、および日本と世界の文化的景観の二面を捉える。自然景観には各地の特色をもつ地形的景観の写真が多く、文化的景観の場合は家屋・棚田・石油化学コンビナート・阿波踊り・オアシス・ゴム園・地熱発電所・鉄鉱山など内容は多彩なものであるが、共通して地誌を学ぶ重要なポイントに合致する写真が列挙される。

最後の8章は地理写真再考という内容で締められ、高校・大学での写真を用いた授業に対する生徒、ならびに学生からの種々な反応が集約されている。これを通じて、著者は昨今、地理(学)教育においては図表の活用に比重が置かれているが、地理写真の利用も必要であると力説しており、この点は評者も共感をもち、とりわけ地誌の授業における有効性は大きい。

以上が本書の主な内容であるが、ここで1つ気づいた点について触れておきたい。この書物の表題は「写真地理を考える」と明示されている。だが、本文には地理写真という表現は随所にみられ、他方、写真地理に関してはほとんど述べられず、したがって、その定義や意味が不明瞭に思われる。もう少し写真地理を考え・分析する、あるいはその成立を試みるスペース確保の必要性を感じた。

いずれにしても最初に述べた如くすべて個人単独で撮った日本・世界各地の臨場写真を体系的に1冊の書物に組み立てた業績は極めて尊いものであ

る。さらに、この書物の骨組みはアイデアと着想の良さが認められ、他に例の乏しい独創的な展開方法を確立している。なお、本書は読者の好評を受け、2013年11月に追加再版された。